

## ネパールシニアボランティア 2 年間 (6-3) -カリガンダキ河を下る：ジョムソ ンからタトパニヘー\*

吉田勝（橋本市）

### ジョムソンーツクチェ

ジョムソンに一泊し、翌日からはカリガンダキ河に沿って4～5日のハイキングでミャグディ郡の郡庁所在地であるベニに着く。あるいは途中から本流を離れてゴラパニ峠越えでフェディに出る。いずれの場合も、そこからバスでポカラに出ることになる。もちろん、余裕の無い人は、ジョムソンからポカラへ再び飛行機で戻ることできる。

ジョムソンからは結構広い道があり、農業車やバイクなどがごくたまに走っている。前もって連絡しておけば、ここから下流1日のトレッキング行程にあるレテまで乗っていけるだろう。しかし我々は調査を続けて行くために、全ルート歩き通さねばならない。

ジョムソンの南隣の村はマルファである。ここマルファとその南のツクチェ村は、ジョムソンとうって変わって緑の多い、のんびりした農村である(図1, 2)。ここはりんごの産地であり、ジョムソンからベニまで、マルファりんごがたくさん道端で売られている。このりんごは日本のりんごに比べて著しく小さく、形も悪いが、味は逸品である。多分摘んですぐに売られるので、新鮮さ充分のためもあるだろうが、りんご本来の味も真に良い。マルファとツクチェでは、りんご果実のほかに、りんごブランデーが売られており、これもまた、大変に結構であった。アルコール度は30度以下の感じで、味もよく、飲みやすい。カトマンズでは入手できそうもなく、私たちはそれぞれに何かか土産に購入した。

マルファには1888年頃に仏僧の河口恵海師が1-2ヶ月滞在したそうで、彼が宿泊した宿屋は現在、河口恵海博物館となっている。私たちはこの博物館の前に新しく建てられたゲストハウスに泊まり、宿のご主人に博物館を案内してもらった(図3)。このご主人の父親が同師の案内をしたということで、説明はなかなか実

感にあふれたものだった。



図1 緑多いマルファの村遠望



図2 きれいなマルファの街並み



図3 ゲストハウスの旦那と息子

マルファ付近から南数キロの間、カリガンダキ河は上流左岸にニルギリ峰、下流右岸にはダウラギリ峰が時々見事な姿を見せる。2時間程歩

いてツクチェの村である。ツクチェは、ネパールのビジネスを担っているタマン族の中心の富裕な村であり、家々も町並みもなかなかきれいで整った感じであった。ツクチェ村は長野県の都祁村と姉妹村縁組を持っており、毎年10人前後の村人達がお互いに交換訪問しているそうである。日本とは係わり合いの深い村である。それにしても、このような山村の人達が毎年10人レベルで交歓訪問をしているとは、驚きであった。

### ツクチェーガサ

ツクチェから広いカリガンダキの河床に沿って陽光の中をのんびりと下る。行く手にダウラギリ連峰がぐんと近く、次第にその全貌を現す。最高のヒマラヤトレッキング気分である(図4, 5)。

ラルジュンの北で、ダウラギリ氷河から流れるグルサンバイ谷を、近道を選んで冷たい徒渉をしたり(図6)、約3時間でコケタティ村着いた。これまで1-2kmの幅広かったカリガンダキ河は、ここから急に狭くなる(図7)。

私たちの調査対象である地質もここから、これまでのテチス堆積岩類から、高ヒマラヤ片麻岩類に変わる。このヒマラヤを代表する2つの地質帯の境界には、第三紀(約2000万年前)の真白い花崗岩の貫入する見事な露頭が、コケタティ村対岸のチャクタン谷の入り口で観察された(図8)。



図4 ツクチェへ向かう。ツクチェ峰が素晴らしい

コケタティあたりから南は温帯-広葉樹林帯に入るようで、段丘も山の斜面も、緑いっぱい森林である。しかし、村の対岸を2時間ほど登るとたちまちダウラギリ氷河へと続く針葉樹林帯になり、さらに上ではお花畑だ。ここからはジヨムソンまで続くカリガンダキ河の上



図5 ツクチェ南からダウラギリ連峰を望む



図6 グルサンバイ谷を渡る



図7 広い河床は彼方のコケタティで急に狭くなる



図8 花崗岩（白色）がテチス層群（灰色）と貫いている



図9 ダウラギリ（左）とツクチェ峰（右）が背後に聳えているレテの村



図10 ガサの村の手前で荷駄隊が来る



図11 カリガンダキ河のテラス

流から、更にもその上部のテチスヒマラヤの山々が見事である。更に2時間も歩けば、ダウラギリ氷河の末端に行き着くことができるだろう。そこはもう雪と氷のツンドラ気候帯だ。

コケタティから約2時間、低い段丘の上をトレックしてレテの集落に着く。私たちはジョムソンを出て3泊目の夜をここで迎えた。ここも結構広い石畳の道路が走る、なかなか



れいな村である。トレッカーのチェックポストもこの村にあり、ここで登録証のチェックを受ける。翌朝7時出発、西にダウラギリとツクチェピーク、東にニルギリとアンナプルナがぐんと聳える景観はすばらしい(図9)。

レテの段丘南端の急坂を50mほど下り、つり橋を渡って右岸の緑多い山腹に削られた小径をどんどん下って約3時間でガサの村に着く(図10)。ここでまたつり橋を渡って左岸に移るのだが、ここでネパール警備兵のチェックを受ける。

### ガサ-タトパニ

ガサから下流はマオイスト(ネパール共産党武闘派)の勢力に入るため、通行人はきびしいチェックを受ける。実は私の野外調査に対するJICAの許可条件は、ガサ以南には入らず、ここから引き返してジョムソンから飛行機でポカラに戻るべしというものであった。しかし、ジョムソンからこれまで、下流のベニから登ってきた100人程度の人たちに話を聞いた限り、JICAが想像していたようなマオイストと政府軍の戦闘や、マオイストによる税金徴収は全くないということであった。また、ガサから再び往路を引き返してジョムソンでフライトを待つと、フライトが欠航すると予定の日までに戻れない恐れがあった。それやこれやで、私たちはベニを通らずに、ゴレパニ峠を越えて直接にポカラに出ることにした。ガサから2時間ほど、左岸の高位段丘や山腹斜面の径をたどると(図11)ダナの村に出た。ここは右岸の広い低位段丘に開かれた明るい村である。この村には、ヒマラヤの大断層である主ヒマラヤ中央衝上断層が走っており、コケタティからずっと続いていた高ヒマラヤ片麻岩が、この断層を境に低ヒマラヤ(弱変成)堆積岩に変わるのである。私たちの4泊目はこの村だった。

村の中を散歩したら、赤ん坊を背負った可愛い女の子が人懐っこく話しかけて来たが、写真をとったらチップをねだられた(図12)。

ここから南は河床から10~20mほど高い低位段丘や斜面を伝うルートで、約3時間でタトパニ村だ(図13、14、15)。ここは快適な温泉場

で知られた大きな古い村で、新旧様々なゲストハウスが軒を連ねている。温泉は泉源が65℃で湯量も多い。川原にコンクリートで大きな湯船がつけられており(図16)混浴である。地元の女性はサリーやタオルをまとい、欧米のトレッカーらは男女ともほとんど皆が水着である。わたしたちもタオルや下着つきであったが、存分にゆったりと温泉浴を楽しむことができた。



図12 ダナの少女たち



図13 険しい山道を地元の人達が何気なく通る

### ゴラパニ峠越え

タトパニから、トレッキングルートは、谷沿いの路をベニまで1-2日で行るか、あるいは3200mのゴレパニ峠を越えてポカラにでる3-4日間のルートがある。前述のように私たち

はゴレパニ越えを選んだが、これはきつかった。タトパニの標高は1300mほどで、ここから約2000mも登らねばならないのであった。大きな石楠花などが生い茂る村の中を、はるかにダウラギリを眺めつつ(図17)ゆっくりと登り、途中標高2500mのガレ村で1泊し、翌



図14 タトパニの村はすぐそこ



図15 タトパニの村



図16 タトパニの温泉



図17 ゴレパニ峠で、調査隊一行



図18 ゴレパニの土産物売り



図19 マオイストの車道妨害工作



日の夕方ようやくゴレパニ峠に着いた。色とりどりのゲストハウスや露店が多く、旅行者もこれまでに多く、にぎやかな“町”の感じがする宿場村である（図 18）。ここから 15 分～20 分ほどの小ピークから見るアンナプルナは素晴らしいということだったが、私たちにその余裕はなく、翌早朝に出発し、フェディに 3 時頃着いた。ここからバスに乗るはずだったが、マオイストの交通妨害で道路には両側の大木が倒されて無茶苦茶な状態で（図 19）、2 時間ほど歩いてようやくバスをつかまえ、ポカラの街に着いたのは夜の 9 時を過ぎていた。しかし何はともあれ、予定の日ぴったりに文明の都市（？）に到着することができたのである。

### タトパニからベニへ

カリガンダキトレッキングルートは、本来は最後までカリガンダキ河に沿ってベニに出るルートである。このルートは私達がネパールに赴任して以来ずっと、JICA 事務所では通行禁止としてきた。2004 年 3 月にベニの郡庁がマオイストに襲撃されたこともあり、かなり厳しいものだった。しかし私達はこのルートを通らなくては、カリガンダキ河地質災害ガイドブックを完成できない。いろいろと苦慮していたところだった。しかし、後に本シリーズで紹介するように、2004 年 10 月に南～東南アジアの JICA ボランティアを集める自然災害広域セミナーの野外ワークショップがこのルートで行なわれたのだが、このワークショップで JICA はついに、タトパニ～ベニルートの通行に OK を出した。以下はその広域セミナーの私の報告書から抜粋した。

10 月 11 日、朝 6 時、タトパニ温泉は地元の奥さん方が 10 人程も入浴していた。15m 四方くらいの湯船の向こう側にサリーなどをまとった女性群、こちら側には水着やタオル等を装った男女のトレッカーと一見住み分けていたが部分的に混合したりして、なんとなく楽しい雰囲気であった。名残は惜しかったが予定通り 7 時にベニに向けて出発した。総勢 30 人である。

出発してすぐ、タトパニの南 1 km ほどのところに、左岸の大岸壁に大きな岩崩れ（地すべり崩壊）の痕があった。これは 1998 年の事件で、カリガンダキ河は堰き止められ、そのためタトパニ村の大部分が 7 時間にわたって水の下になったという。丁度道で会った村の人達に、当時の生々しい話を聞くことができた。



図 20 ガルコタのつり橋は羊でごった返していた



図 21 ガルコタ村へのつり橋を渡る村人たち

タトパニから2キロほど下流、ガルコタのつり橋で左岸に渡る。つり橋では、カトマンズのダサイン祭に向かう地元の人達やごちそうの羊達でごった返していた(図20、21、22)。



図22 険しい栈道を行く



図23 ベグコーラ手前、ルートは崩れていた

ゴレパニ峠越えのルートをここで分け、ベニルートはそのまま左岸のテラスや山腹斜面を伝って行く。

ここから下流のカリガンダキ河兩岸は、あちこちに殆ど連続的に、とてつもなく急で高い崖が発達している。真に特徴的な地形である。これはこの地域の低ヒマラヤ変堆積岩類の中に、堅い珪岩層のためである。

ルートは再び右岸に渡り、タトパニから8-9キロほどのベグコーラ(谷)の合流だ。ここからは車道ができていたが最近の水害でところどころ崩れていて、期待の車はいない。さらに2キロほど南下し(図23)、バイシカリ部落を過ぎたあたりで車を待ち、1時間ほどしてようやく車を捕まえた。途中ラフガート河で車を変え、ベニにグループの先頭がたどり着いたのは3時半であった。後発グループは約1時間ほど遅れて到着し、手配のバスでベニを5時半に出発し、ポカラに着いたのは真っ暗な夜8時半になった。

### ポカラの平和記念塔へ

野外ワークショップ10日目の10月13日は早朝、フェワ湖畔に聳える比高300mほどの日本山妙法寺/平和祈念塔に登った。朝6時、ホテルからバスでペワ湖南のシッダルタハイウェイに入り、デビスフォールから1キロほど西のトレッキングルートの入口まで行き、そこから比高250m、1時間ほどの登りであった。朝ホテルを出るときは、上空には厚い雲がかかっているようで、あきらめて出てこなかった人達もいたが、登るにつれて雲は薄くなり、頂上



図24 平和記念塔とアンナプルナ峰

では雲から抜け出した。アンナプルナプルナ連峰の見事な白い稜線が目の前だった。ダウラギリや遠くマナスルも輝いていた(図 24、25)。そのうちに下の雲も晴れ、ポカラ盆地が全容を現した。ペワ湖と湖畔のポカラの町、それを取りまく低いレッサーヒマラヤの山々が手にとるように観察され、ところどころの地すべりの痕や、ポカラ盆地を作ったセティ川の土石流の

形跡なども明らかであった。興奮覚めやらぬまま、湖に向かって急な北斜面をくだり、湖畔でボートを捕まえて湖を渡り、ホテルに帰着したのは9時ころだった。

*\*PASPORT 誌に投稿, 2007年5月30日*



図 25 平和記念塔付近から見るアンナプルナ連峰